

文学博士

村井 順著

建礼門院右京大夫集評解

東京有精堂

著者略歴

明治三十七年岐阜県に生まる。早稲田大学国文学科卒。現在愛知淑徳短期大学教授。文学博士
 〈著書〉「源氏物語論」
 上・下「常緑本徒然草」
 解釈と研究」その他。

昭和四十六年四月三十日 初版発行 昭和四十九年四月二十日 三版発行 建礼門院右京大夫集評解	著者 村井順	発行者 東京都千代田区神保町一ノ三九 山崎 誠	印刷者 東京都新宿区市ヶ谷富久町一一三 株式会社 井村印刷所	発行所 東京都千代田区神田 神保町一丁目卅九番地 振替口座東京四〇六八四番 有精堂出版株式会社
--	----------------------	--	---	--

乱丁・落丁はおとりかえ致します。

は し が き

『建礼門院右京大夫集』は、女性の書いた平家物語といふことができる。著者がこの家集に愛着を覚えるのはそのためである。といふことはまた、著者が若いころから愛読している『平家物語』という秀れた文学が、背後にあるから、この家集に心をとらえられたといふことになる。本書に純粹の史書でない『平家物語』の本文を多く引用したのも、著者が故意に『平家物語』との交流を考えたからに外ならない。

私事にわたるけれども、著者が最初に本書の執筆を完了したのは、昭和八年ごろであつた。そのころは不況時代で、無名の著者に出版の願いがかなえられないはずもなく、草稿は空しく押入れに納められて、幾年かを過ごした。その後昭和十四年ごろ、渡辺竹二郎・山路平四郎・窪田章一郎・暉峻康隆・相良克明などの諸君が集まり、本書を輪講することがあつて、大いに教えられるところがあつた。それを機会に著者は旧稿の補筆清書を思ひたち、なお疑問のところは、恩師故五十嵐力博士の教示を仰ぎ、ようやく意に満ちた物を完成した。けれども、やはり出版の希望はかなえられなかつた。昭和十八年ごろ、築瀬一雄君の尽力で、抄本ならば出版してやろうという書店が現われ、抄本を作つたが、当時は軍政下で検閲が厳しく、不急の書として不許可になつた。だが、当局が好まぬも道理、焼土戦術の悲哀

は、すでに本書の作者の詠^{なぐ}めているところであり(百十四段)、戦没者未亡人の痛嘆は、遠く八百年の昔、右京大夫の体験したところで、彼女は資盛生前の恋文を集め、料紙にすぎなおさせ、みずから地藏菩薩を描き、経を書き、供養をしているではないか(百十段)。今日の戦争未亡人は、亡夫生前の手紙を、はたして何に使っているであらう。

著者のなめた悲運はそれだけにとどまらず、昭和二十年五月末の帝都の空襲で、草稿は惜しくも焼失してしまった。その後美濃の山中に、危き命を逃れ、インフレの嵐に吹きまくられつつつ日を送るにつけ、世に出しておきたいと思うのは、本書のことであった。そこで偶然難をまぬがれた最初の下書きを見つけ、筆を加えて新しく草稿を作った。けれども、恩師の教示も、友人たちの意見も、もはや脳裡になく、再び元へもどって自己流の解釈をせざるをえなかった。だが、本書に少しでも見るべき説があれば、それは前記諸賢の学恩のたまものであると思っていだきたい。

こうしてできあがった草稿を、あまりにきたなくなったので更に清書しなおし、そのころ松岡浩一君という熱心な古典愛好家から有益な助言を与えられたりしたのだが、やはり出版の望みはなかった。また、二十数年の歳月が流れ、著者は短大の教師となり、この家集を学生に毎年講義することとなった。ところが、講義にあたって、諸本の解釈を調べてみると、難解なところへ来ると、著者の意に満たない解釈ばかりである。それは「心ざし」(九十五段)を愛情と訳さねばならないのに、「信仰心」と訳しているような幼稚な誤りから、雪の日に、「たゞひきあげていりきたりし人」(四十七段)と読むべき所を、

「たゞひきあけていりきたりし人」と読んで、「だしぬけに戸をあけてはいってきた人」と誤っているような、やや高度な古典の常識を要するものまで、実にたくさんさんの誤訳がある。こんなに本文の解釈を誤っているのに、黙って見過ごすことは、この家集を愛する者として、許すことができないと著者は考へ、何とかして自分の解釈本を世に出して、大方の批判を仰ぎたいと思ひたち、そこで更に旧稿の補筆訂正を加えることとした。そしてこのたび幸にも有精堂川村治助氏の好意で、本書が世に出ることとなった。著者としてこんな喜ばしいことはない。

本書の成るにあたっては、底本にさせていただいた井狩正司博士著『校本建礼門院右京大夫集』の外、富山房文庫佐佐木信綱博士著『建礼門院右京大夫集』・富倉徳次郎博士著『右京大夫・小侍従』・佐佐木信綱博士著『中古三女歌人集』・島田退蔵氏著『建礼門院右京大夫集』・本位田重美氏著『評註建礼門院右京大夫集全釈』、および、雑誌『国文学』に久保田淳氏が連載されている「建礼門院右京大夫集評釈」などに教えられるところが多であつた。また、本書巻末の「略年譜」は久徳高文氏の研究に負うところが多かった。そして、挿入の写真については、寂光院・赤間神宮から多大の好意を受けた。あわせて謝意を捧げるものである。

昭和四十六年四月

村井 順

はじめに

一、本書はこの家集の研究で一番おくられている口語訳に、もっとも力をそそいだ。この家集はそれほどむずかしい本文ではないのに、少し難解な所へ来ると、ほとんどすべての所が、著者の解釈と従来の解釈とは、相違しているのだらういっている。著者は故意に変わった訳を試みたのでは決してないし、自分の解釈が正しいと信じている。

一、本書の本文は、細川家旧蔵九州大学本を底本とされている井符正司博士の『校本建礼門院右京大夫集』によらせていただいた。けれども、意味の通じない所は、群書類従本その他によって改め、一々その旨をことわっておいた。また、本文は歴史的仮名使いに統一し、読みやすいよう多少漢字に改めた。

一、本書は読者の便宜をはかって、段を設け、和歌には番号をつけた。

目次

はしがき

はじめに

解題

平氏系図・建礼門院右京大夫系図

評解

一 一家の集などいひて

二 高倉の院御位のところ

三 おなじ春なりしにや

四 頭中将実宗の

五 おなじ人の、四月みあれの比

六	故建春門院の御ために	一九
七	近衛殿、二位中將と申しし比	二二
八	いつのとしにか	二三
九	なにとなくよみし歌の中に	二五
一〇	中宮の御かたにさぶらふ人を	四〇
二	小松のおとどの	四一
三	おなじおとどの	四二
三	いづれのとしやらむ	四三
四	八島のおとどとかや	四四
五	なにとなく、みきくごとに	四六
六	秋のくれ、おましのあたりに	四八
七	つねよりもおもふ事ある比	四八
八	秋の月あかき夜	四九

一九	たちばなをみよとて	四九
二〇	かけはなれいへば	五〇
二一	うせにしせうとのために	五一
二二	内の御方の女房	五二
二三	花をみて	五四
二四	大炊御門の斎院	五四
二五	この中将の君の	五六
二六	とかく物おもはせし人の	五七
二七	太皇太后宮より	五八
二八	四月ばかり	六〇
二九	はなたちばなの	六〇
三〇	五月五日、宮の権大夫	六一
三一	なげくことありて	六二

三三	成親の大納言の女君の	六三
三三	すぶりのついでの手習ひに	六四
三四	秋の末つ方	六四
三五	三位中将維盛のうへのもとより	六六
三六	忠度の朝臣の	六七
三七	御匣殿の、さとにひさしく	六八
三八	はるごろ、宮の	六九
三九	ゆかりある人の	七三
四〇	ぶくになりたる人	七三
四一	小松のおとようせ給ひてのち	七四
四二	成親の大納言の	七五
四三	安元といひしはじめのとしの冬	七六
四四	里なりし女房の	七七

四	宮の、六波羅殿に	七
四六	兼光の中納言の	七九
四七	雪のふかくつもりたりしあした	八〇
四八	山ざとなるところにありし折	八一
四九	せうとなりし法師の	八三
五〇	冬の夜、月あかきに	八三
五一	人の心のおもふやうにも	八四
五二	おなじ事をとかくおもひて	八五
五三	いとひさしくおとづれざりし比	八五
五四	心ならず宮にまゐらずなりにしころ	八六
五五	そのころ、ちりつもりたる琴を	八七
五六	みやの御産など	八八
五七	となり庭火の笛の	八九

六	おほやけの御かしこまりにて	九〇
五	しりたる人の	九一
六	炭櫃のはたに	九二
六	何事もへだてなくと	九二
三	はじめつかたは	九三
五	そのかみ、おもひかけぬところにて	九五
四	そよろきぐさなりしを	九七
五	また、おなじことをいひて	九八
六	まつりの日	九九
七	かやうにて、何事もさてあらで	一〇〇
六	車おこせつゝ	一〇一
六	おなじ夜、床にて	一〇三
七	またしばし音せで	一〇三

セ	たえまひさしくて	一〇四
セ	夢にいつも／みえしを	一〇五
セ	人の女をいふ人に	一〇六
セ	せんなきことをのみおもふころ	一〇七
セ	いづかたにか	一〇七
セ	父おとどの御ともに	一〇八
セ	つねにむかひたるかたは	一〇九
セ	東は、長楽寺の山のうへ	一一〇
セ	雲のうへもかけはなれ	一一一
セ	宮にさぶらふ人の	一一二
セ	治承などの比なりしにや	一一三
セ	大方の身のやうも	一一五
セ	西山なる所にすみし比	一二六

八四	まへなる垣ほに	一七
八五	月の夜、れいの	一八
八六	冬になりて	一八
八七	なにとなく、閨のさむしろ	一九
八八	宮にさぶらひし	二〇
八九	冬ふかきころ	二〇
九〇	上藤だちて	二二
九一	宮のまうのぼらせ給ふ御ともして	二六
九二	この人もよしなしごとをいひて	二八
九三	いつも、同じことをのみ	二〇
九四	なにとなきことを	二〇
九五	母なる人のさまかへて	二二
九六	高倉院かくれさせおはしましぬと	二三

六七	中宮の御心のうち	一三四
六八	寿永・元暦などのころ	一三五
六九	いはんかたなき心ちにて	一四〇
七〇	夜のあけ、日のくれ	一四一
七一	おそろしきものゝふども	一四二
七二	かへる年の春	一四三
七三	その春、あさましく	一四五
七四	重衡の三位中将の	一四六
七五	又、維盛の三位中将	一四八
七六	ことにおなじゆかりは	一五一
七七	またのとしの春ぞ	一五五
七八	ほどへて、人のもとより	一五七
七九	さても、げにながらふる	一五八

二〇	たゞむねにせき	一六〇
二二	夏ふかき比	一六三
二三	なぐさむ事もなきまゝには	一六四
二五	北山の辺によしある所のありしを	一六五
二四	また、物へまかりし道に	一六八
二五	たゞ同じことをのみ	一六九
二六	女院、大原におはしますとばかりは	一七〇
二七	なに事につけても	一七四
二八	なぐさむことは	一七五
二九	心ざしの所は	一七五
三〇	関ひとつこそこえぬるは	一七六
三三	つくぐとおこなひて	一七六
三三	風にしたがひて	一七九